



特選

(中学生)

「命って何だと思う？」

私立滝川第二中学校 一年 高野 泰一

「命って何だと思う？」

小学校の時、一年に一回はこう訊かれる。その度に僕は考えるが、どれも何かちがうなとなつて、答えが出ないのだ。そりやそうだ。分かるはずがない。命について知るにはまず生きるとは何かを考えなければいけない。そして、生きることを知るには死について知らないといけない。つまり命について理解できるのは死後。そう考えていたからだ。

しかし、二〇一六年三月三十一日。この考えに大きな影響を与える出来事が起こった。僕の妹が亡くなったことだ。家族は皆、悲しみに暮れ、各々命について真剣に考えた。少し妹の話をしよう。

妹は二〇一五年、一月十七日、偶然なのだろうか、阪神淡路大震災からちょうど二十年の日に生まれた。家族全員の立会出産で、僕もそこにいた。生まれてきた妹はあまりにも元気がなく、

数日後に医者にかかった。『プラダーウィリー症候群』返ってきた言葉はこれだった。知らされて数日の心情を母は、「障害を受け入れる現実の辛さは、言葉では言い表せないほど大きかったけれど、助産院のスタッフや家族、この子をかわいがる兄二人にやされ、そして助けられた。」と記している。この子の名は、「ちはる。」「千の晴れ、『千晴』だ。いつでもはれぱれとしてほしいという意味と、兄二人の名前、たいちとはるきと共に生きてほしいという意味が込められている。とても良い名だ。大切にしてほしい。」

そして月日は流れ三月下旬。僕は、千晴が気を失ったと聞き、病院へとんでいった。千晴はベッドで体にいろんなチューブをつながれて寝ていた。そして、もう脳死しているという。僕は胸がいっぱいになった。昨日まで一緒に遊んでいたのだから。そして三月三十一日。雨が降っていた。千晴はもう助からない。これ以上の薬の投与は体への負担が大きすぎる。だから、チューブや機械を全て外し、最期を見送ることにした。シャワーを浴び、服を着せられて、また家族のもとに戻ってきた千晴。この子を見ると、家族五人の日常がよみがえってきた。その時間は長いようで短く、また

障害をもつて生まれた妹が、一歳二か月で亡くなった。「妹をかわいがる兄二人に助けられた」という母の心情、「いつも晴れ晴れとしてほしい」という名前の由来など、家族の愛情の深さを感じる。妹が病院に運ばれ、最期を看取するときの様子は心情も含め克明に描かれている。個性的な表現で、妹の名前の由来と関連付けた「天気の子」のくだりは印象深い。文末の「答えを出すにはもう少し時間がかかる」は筆者の素直な心境を語っている。



短いようで長く僕は感じた。こうした中で、千晴は命を引きとった。その時僕は後悔した。何に後悔したのかは、今でも分からない。しかし、そんな僕とは対照的に、千晴は笑っているように見えた。その後僕とお父さんは何の目的もなく外へ出た。外は雨が止んで、雲から太陽が顔を出している。

今、千晴は我が家の天気の子神様になっている。晴れなら「千晴が笑っている。」雨なら「千晴が泣いている。」曇りなら「千晴が寝ている。」という。命については今でもさっぱり分からない。だが、あの日から僕は生きる意味について考えるようになった。答えを出すにはもう少し時間がかかりそうだ。